

論文要旨

氏名 歐 薇蘋

論文題目 (外国語の場合は、和訳を併記すること。)

楊逵研究——植民地時代における楊逵の「転向」を中心に

論文要旨 (別様に記載すること)

- (注) 1. 論文要旨は、A4版とする。
2. 和文の場合は、4000字から8000字程度、外国語の場合は、2000語から4000語程度とする。
3. 「論文要旨」は、フロッピーディスク(1枚)を併せて提出すること。
(氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。)

楊逵研究——植民地時代における楊逵の「転向」を中心に——

社会文化科学研究科 文化学専攻

091-g9107 歐 薇蕨

本稿は植民地時代における楊逵の文学観の特質、つまり作者が当時の社会状況の移り変わりに従って受けた影響が作品の中にどのように表れているのかについての考察を行ったものである。また、戦時下に皇民政策に迎合するため、派遣作家として報告文学を書いて、「皇民作家」に「転向」したという指摘とは違う視点から読み直し、作家としての「転向」問題の位置づけを究明することを目的としている。さらに、作品と作者自身が書いた評論と照らし合わせ、楊逵の思想にある「民族意識」について検討した。

「はじめに」では、本論の研究動機や研究目的を述べ、そして先行研究を取り上げながら、本論の目的を明らかにした。上文にも述べているように、皇民化運動の下で作品を発表した楊逵は、プロレタリア作家から「転向」したと考えられるという指摘がある。しかし、植民地側という環境と苦闘する状況であったため、単純に断言することはできない。また、不自由な環境であったため、たとえ作品の中に統治者側に対する鋭い指摘や抵抗の表現がはっきり描かれていないとしても、統治者側の政策に追従していたのではなく、楊逵が常に自分の民族的立場を堅持していたことを探ってみた。

第一章では楊逵の戦前の作家生涯を具体的に日本留学時期（1924～1927）、台湾の社会運動への参加時期（1927～1933）、文学創作が中心となる時期（1934～1937）と戦時中の「皇民作家」時期（1941～1945）と四つの時期に区分して論じた。そして、さらに、楊逵の階級意識及び資本主義批判、楊逵のプロレタリア志向から台湾社会での実践、民族意識と階級意識の結合と戦争下の楊逵の「転向」と再出発を四節に分けて詳しく論じた。楊逵は作品のタイトルから、時代背景の移り変わりにしたが、その当時の状況を作品の題材にしているとよく言われている。そのため、これらの時期ごとに、その時代的、社会的背景と楊逵の文学観の変遷をあと付け、作家の文学活動がいったいどのように分けられるのかを改めて考察した。

第二章では、処女作の「自由労働者の生活断面」と「新聞配達夫」の二作を取り上げ、作品中にプロレタリア思想が見られるかどうかについて分析した。1924年に楊逵が日本に留学した当時は、日本の文壇ではプロレタリア文学が盛んであり、プロレタリア作家との交流を通して、プロレタリア思想の影響を受けたことは言を俟たない。しかし、たとえ小説「自由労働者の生活断面」では、プロレタリアの「階級意識」の目覚めが語られていても、植民地作家の作品である以上、単純にプロレタリア文学の枠に入れて良いだろうか。1927年に、帰台後の楊逵は台湾の現実社会に密着した農民運動や文化活動で活躍する中で、作家自身の思想も少しずつ変化していったに違いないのである。そのため、「新聞配達夫」の内容を見ていくと、資本階級への批判を強調すると言うよりも、むしろ植民

地側の苛酷な運命を深く理解した上で、統治者側への非難を行ったと言えよう。また、プロレタリア文学の「資本階級⇄無産階級」という図式は楊逵の作品中にも描かれているかに思われるが、その図式を台湾社会に持っていくと「村長・大人・巡査⇄農民」に変化する。すなわち、作者は日本体験を経て、プロレタリア図式を模倣しようとしているものの、単なる日本のプロレタリア文学者の立場からは、台湾人の労働者の苦しさは理解することができない。内地の人にとっては無産階級は単に資本階級の圧迫を受けていると言えるが、被植民地側の台湾人には両面性があることを看過することはできないことを明白することができた。

第三章では、1936年に発表した小説「田園小景」を取り上げた。30年代に入ってから、「満州事変」があったため、楊逵は社会運動の実践から離れざるを得なかった。そして、文学の「再出発」として、文学活動に専念するようになる。小説「田園小景」は、表面的にはタイトル通りに「農民の日常生活と地主の間のいざこざをコミカルに描いた作品」と思われる。だが、考察によって、農村内部には様々な利害関係があり、資本家階級と労働者階級・農民階級の対立の暴露になっていることがわかる。第二章に述べてきた「自由労働者の生活断面」から見えてきたのは、プロレタリア文学の影響であるが、それはやはり楊逵の階級意識の表れでもあった。そして、「新聞配達夫」の創作時期を経て、さらに文学の再出発に至って、今までの資本階級批判に加えて植民地体制を批判対象に入れるようになる。つまり、この時期の作品からは階級意識と民族意識の結合のような様相を呈していることを明示している。

第四章では、文学創作を暫く休んでいた楊逵が、40年代の前半にまた台湾の文壇に戻って書き上げた、「鷺島の嫁入り」「無医村」と「泥人形」三作を取り上げた。この三作のいずれも表面的には、大東亜文学建設として求められている「共存共栄」を宣伝する内容を描いている。しかし、「共存共栄」の体制下に存在しないはずの「我利々々亡者」が常に登場する。大東亜戦争の完遂のため、日本内地だけではなく、支配地の台湾にまで戦争協力がよびかけられていた。だが、自分の利益だけ考える「我利々々亡者」が現実存在している以上、「一心同体」や「共存共栄」というスローガンが単なる美辞麗句にほかならないことを作品の考察によって明らかにした。また、日本統治下で“支配者側を批判する”という敏感なテーマは存在し難いため、楊逵が統治者側に目をつけられないように、“我利々々亡者”が「内地人」であるかどうかをもちきりさせていなかった。たとえ40年代の皇民化政策下という創作の不自由な時期にあっても、楊逵の作品から読み取れる支配者側や資本家たちに対する終始一貫した抵抗の姿は相変わらず残っていたことを明らかにすることができた。

第五章では、戦時下に発表した「増産の蔭に」を取り上げた。日華事変の勃発により、台湾が戦時体制下に組み込まれるにつれて、楊逵も台湾総督府主導の皇民文学運動への参加を余儀なくされる。1938年以後のある時期に、楊逵が官憲に対して「転向」を表明し、時局順応の姿勢を示したことは確かであるから、戦時中の楊逵は「皇民作家」と呼ばれている。しかし、植民地下においては簡単に反抗することはできないため、ときには表面的に従うのも一つの手段であり、目的ではない。そのため、正面から台湾の現状を批判

していくことはないにしても、「皇民作家」時代の楊逵の作品を通覧すれば、「皇民思想」の宣伝より、労働者のために官憲へ呼びかけることこそが彼の意図であることが作品を通して読み取れる。つまり、「台湾文学界の総蹶起」が呼びかけられても、それに無批判に呼応するのではなく、常に台湾の読者が求めている文学を念頭においていた楊逵の姿を明白にした。

「終わりに」では、各章を概観して考察した上で、植民地時代における楊逵の文学観の特質を改めてまとめた。そして、主に楊逵の「転向」概念や「民族意識」についての問題に焦点を当て詳述している。まず、たとえ戦時体制下に組み込まれても、決して「転向」はしていないのだと論じた。台湾の社会構造や日本支配そのものをしっかりと理解していた楊逵は、官憲の疑いを招く「民族意識」を胸の奥深くに潜め、じっと保持し続けている労働者の立場にあるという気持ちを更に強く描き出しており、勤労尊重を前面に立てることで台湾人民を守ろうとしたことをはっきりさせた。そして、作品の考察を通して、常に台湾及び台湾に生きる人々のことこそが楊逵を支えであったことを明示し、作品に表れている楊逵の「民族意識」は漢民族としてのそれではなく、むしろ台湾人としての「民族意識」であったことをも明らかにした。